

島原手延素麺の歴史（明治期以降）

西暦	和歴	
1804～181863	文化年間 天保3年	「西有家村郷土誌」（大正7年） 西有家町須川志斗・高橋権寿 挽き白にて小麦を製粉、麺類を製造する。 「有田村庄屋石橋家日記」 島原藩の武士を鮎返りの滝で、素麺でもてなす。 ☆ 播州素麺の産地化 文政年間（1816～29）、小豆島素麺（1861～3）
	明治9年	「各区農産表」 第7大区（南北有馬、西有家、有家、布津）で素麺が4万5千円の生産額が記してある。
	12年	＜ 商い船解禁 ＞
	25年	「南高来郡町村要覧」 「素麺、東西有家、大三東等を最とす。其の他の各村にても多少製造有り、製造額百十五万五千斤、価四万四百二十五円、輸出額五十六万五千斤、価一万六千九百五十円」とある。各村毎の数量はなく、ただ「西有家村素麺百十六戸 ^{116戸} 」、「東有家村素麺五十一戸 ^{51戸} 」と記してある。 注） 明治9年の方が生産額が上である。 須川船との関係は？
	25年	素麺製造に一大転機訪れる 「マサキ式製麺機」佐賀県・真崎照郷氏が取得する。発明は、西有家・伊崎六郎氏。
	33年	々 西有家・寺田熊太郎氏（須川・もとむらストア地）が、同製麺機を導入し、機械製麺の端緒を開く。
	43年	高橋久治（西有家町新道） 石油発動機による製麺法を研究、翌44年確立。
	明治の終わりから大正	西有家 高橋好十（本町）、柴田福太郎（上八田）、高橋三弥治（本町）伊崎六郎（新町）の各氏も石油発動機を設置。
手延素麺と機械素麺の共存時代が続き、須川そうめんの黄金時代を迎える		
	大正3年	発動機による製粉始まる それまで手回し式挽き白から水車利用による製粉であった。高価なメリケン粉使用から深江産の小麦使用増加する。
	7年	製麺業者が増加するにつれ、品質の不統一は明らかになり、須川素麺のブランド化が大きな曲がり角にきた。
大正7年6月15日付け、島原新聞		
「西有家村須川名は戸数800戸、人口5千人を数え、人家稠密にして商工業頗る旺盛を極めて素麺製造は200余戸にして漸次産額を増加し、1ヶ年産額約20万円に上がり、将来益々進展の傾向あるも、製品の統一を欠き、量目一定せざる。 或いは往々粗製乱造の弊ありて、産額において関西第1の称あるも如上が陥在するため、著しく売行額を損し、常に播州、佐賀各地方の生産品に圧せられ価格は常に低位にあるを例とせり、（中略） 以て、更に〇〇の改善と需給両者の利益を多大ならしめんが為に、堅実な意志の下に、地方の福利を増進せんとし、茲に西有家村、志岐重太郎外24氏発起の下に、有限責任 須川製麺業販売組合なるものを設立……………」		

西暦	和暦	
	昭和4年	高橋久治氏は、製麺業者の技術の改善を願って、三輪素麺同業組合長、島岡義太郎氏を招き龍泉寺において「素麺業の発展についての講演会」を開催する。また、須川天神道に模範工場（現農協事務所下倉庫）を設置し、三輪から技術員を呼んで素麺の技術研究が行われた。 ★ 大正7～8年をピークに250戸あった業者が昭和3～7年頃は106戸まで減少（昭和初期以降、質より量の時代到来。手延素麺は機械素麺にその地位を明け渡す。）
	昭和15年	■ 「西有家製麺工業組合」を現親和銀行の場所に設立。 機械麺と手延麺の両方を取り扱い終戦まで続く。 （組合長 永田 廣、専務 本村秋男、専務 本多信義）
	昭和18年	☆ 戦前・戦後の食料難時代（食料統制）は 機械麺の黄金時代となる。 戦時中の統制経済のため、 流通の主体であった素麺船 （須川船）が徴用さる。
	昭和21年	■ 「長崎県製粉製麺協同組合」が設立。 機械製麺による加盟工場40社。食料事務所による統制経済始まる
	昭和26年	小麦粉の統制が解除され自由に小麦粉が買えるようになる。
	昭和28年	■ 「長崎県島原手延素麺製粉協同組合」が設立 原料等の共同購入、共同販売を行う。
	昭和32年	☆ この頃から三輪の素麺問屋との関係始まる
	昭和34年	■ 「島原手延素麺協同組合」が県手より独立 ☆ 高級品を扱う三輪Y問屋と取引を開始する
	昭和38年	■ 「九州手延素麺組合」（任意）が県手より独立
	昭和46年	設備近代化資金を利用して機械化すすむ。 二丁掛けば機150台導入される。
	昭和48年	■ 「西有家町農協・麺部会」設立 ☆ この頃より、製麺業へ転業者激増し、手延そうめんの黄金期を迎える。
	昭和52年	★ 地元生産者の急増により、生産過剰となり、問屋より買い叩かれる。
	昭和53年	■ 「島原手延素麺組合連絡協議会」が長崎県中小企業団体中央会の指導の基に設立し、 産地組織の統一化に取り組む
	昭和55年	■ 「長崎県島原手延素麺協同組合連合会」を設立 ★ 冷夏、問屋の買い控えに苦しむ
	昭和58年	■ 「島原地区須川手延素麺協同組合」 ■ 「西有家手延素麺協同組合」の両組合、連合会へ加入 ☆ 好況となる 機械導入の次期を迎える、資本力による大型化・多角化へと業界の変化
	昭和59年	■ 「島原天満手延素麺協同組合」連合会へ加入
	昭和61年	★ 不況となる
	平成4年	☆ 好況となる